



— 会員の皆さんがふと感じたこと、気になったことをつぶやく新シリーズ—
第一回は、金井秀行さんのブックレビュー

第5のバイブル・・・「学校の悲しみ」

ダニエル・ペナック（著） 金井 秀行

この本を読んで横っ面を引っぱたかれたような気がした。嘗（かつ）て私も算数その他の科目で劣等生だった。それなのに、教師になった時にはそのことを忘れていた。著者は子どもの頃、折り紙つきの劣等生だった。一家の伝説によると、アルファベットのAを覚えるのに一年かかったという。「心配ないよ。この子だって26年後にはアルファベット全部覚えられるさ」父親は冗談を言って自らを慰めていたそう。学校に彼の居場所はなかった。優秀な三人の兄の一人だけが粘り強く彼の面倒をみたが、落第と放校が繰り返された。

そんな中、中三から高二の間に救世主が現れる。四人の類いまれな教師たちによって、彼は無間地獄から引きあげられる。奥深く眠っていた能力が目ざめ、やがて彼は教師となり、作家となる。彼は大人になっても、サン＝テグジュペリのように子どもの心を忘れなかった。教師になって、まず課題としたのは劣等生の手助けをすることだった。

ところで読み進むにつれ、私の中で疑問が風船のように膨らんできた。これ程の劣等生がどうやって教師になれたのか？読み書きのできない少年がなぜ小説家になったのか？一体何が起こったんだ？答はなかなか明かされず、話は昔と今を往き来する。

百頁になって中三の時、ようやく老国語教師が登場する。俄然、物語は生彩を帯びてくる。彼は、今まで他のどんな教師も見すごしていた少年のある才能に目をつけた。つまり勉強できない、宿題がやれないと巧みに言い逃れるその巧みさの中に作家の芽生えを見てとったのだ。「小論文の練習はいいから小説を書け」と勧めた。これを皮切りに、数学、歴史、哲学の教師が次々と現れ、彼の能力を引き出し自信をつけさせていく。詳しくは本文に譲るとして、著者の姿勢が窺える文を幾つか紹介してみたい。

★知識と戯れる、その能力もまた必要なんです。遊びは一所懸命努力する際の呼吸みたいなものな

んですよ。学習の対象となる素材を用いて遊ぶことは、その素材を自由に扱えるようになるための訓練をやっているということなんです。縄跳びをしているボクサーを子供扱いしちゃいけません。（186頁）

★教師の大きな弱点は自分が知っていることを知らない状態を想像できないということだ。

（334頁）

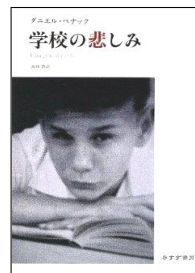
—この自伝風の教育論が書かれた意義は大きい。著者は自らを生き残った劣等生と呼ぶが、だからこそ我々はこのメッセージを読める。

★ぼくは時々「先生のクラスで過ごした時間は本当に楽しい思い出です」と言ってくれる嘗（かつ）ての生徒と道端で偶然再会することがある。けれど、その時ぼくは思うのだ。この同じ瞬間に反対の歩道には、ひょっとするとぼくの授業が退屈で仕方がなかった生徒が歩いているかもしれないと。（109頁）—この謙虚さに脱帽する。

ルソーの「エミール」、マカレンコの「教育詩」、ニールの諸作品、ギュスドルフの「何のための教師」に次ぐ第五のバイブルを手に入れた心地がする。

<金井秀行さんは県立高校で長らく数学教師をされ、現在は限りなく0収入に近い農業に従事中。>

ダニエル・ペナック著／小林章訳
2011年みすず書房刊 4536円



<内容>ぼくはどうやって劣等生状態から脱出したのか？教育と学校についての燦めくような考察がちりばめられた自伝的=物語的エッセイ。2007年度ルノドール賞。
<著者紹介>1944年、モロッコのカサブランカ生まれ。ニース大学でフランス文学を学び、中学・

高校でフランス語の教師を勤め、そのかわら、1985年に児童文学の作家としてデビュー。1995年より作家活動に専念し、子どものための作品、大人のための作品の両方を書いている。

（Amazonサイト・「BOOK」データベースより）